慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 地理学の本質と地理的環境に就いて : 経済地理学方法論に於ける一断想 |
| Sub Title | |
| Author | 小島, 栄次 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1936 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.1 (1936. 1) ,p.23- 46 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19360101-0023 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360101-0023 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と觀た。此の統一體の永續的安寧は其の全成員の窮極至高の幸福に對する第一條件である。(昭和四年版拙著『經濟學史』三二八頁)。ラウ(Karl Heinrich Rau)は財貨の交換は各個國家の境界を越えて擴張することを承認したのであるが、而も斯くの如く爲すに於いて、それは更らに高き等級の經濟を構成することを主張した。時々の國際的關係は考察せらるゝのであるが、而も經濟學の主題は、彼れの見解に於いては唯り國家内の經濟生活たり得るのである。而してヴィルヘルム・ロッシャーに至つて遂に「國民經濟學」(Nationalökonomik 若しくは Volkswirtschaftslehre)は「國民經濟の發達法則の學、經濟的國民生活の學」(die Lehre von den Entwickelungsgesetzen der Volkswirthschaft, des wirthschaftlichen Volkslebens.)であると定義せられた。(Die Grundlagen der Nationalökonomie, Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmann und Studierende, 1854, S. 22.)。諸國民の經濟は其の言語、文學、法律及び藝術と等しく其の文化の一部門であると看做された。斯くて相互相關聯せる數多經濟單位の同一の歷史、同一の國家的境界、同一の文化、同一の風習、同一の法制による結合を稱して國民經濟と云ひ、それを主題とするの學を國民經濟學と稱するの時が到來したのである。

(附記) 吾人が本稿中に關說せるフィヒテの『封鎖的商業國』に關しては故阿部秀助敎授の最「會心の論文」に『フィヒテの經濟觀』(大正十三年版慶應義塾大學經濟學部同人共著『經濟學說研究』三一四一頁)があり、又加田哲二敎授は其の昭和六年版『獨逸經濟思想史』中に於いて明快なる解說を此の書に對して行つて居られる。(同書六一—九頁)。



# 地理學の本質と地理的環境に就いて

## ——經濟地理學方法論に於ける一斷想——

小島榮次

はしがき

筆者は本誌昭和十年九月號に「經濟地理學の實際的任務に關する一考察」と題して斯學の發展史を概觀し、その見地から斯學の本質に關して若干の考究をなした。今こゝでは主として論理的觀點から地理學の本質に觸れ以つて經濟地理學の本質の究明に資したいと思ふが、この一論文は地理的環境と云ふ概念を中心として地理學に對して筆者の抱く疑惑を展開することを目的とし、從つて地理學の本質・その對象・その任務等に關する詳細な考究は他日にゆづつた。

地理的環境の概念を繞る地理學の問題は、斯學にとつて頗る重大なものゝやうに思はれる。經濟地理學の學問的重要性もこの問題に依つて影響されるところが極めて大きいであらう。然し乍ら筆者は、單に疑惑に惱むのみで、それに對する解答を所有しない。且つ又筆者のこの疑惑は故なきものかも知れぬ。そこで本稿に於いて筆

者の貧しい思索の道程を發表し、これに依つて先輩諸氏の示教を仰いで、この問題に對する解答を與へらるゝか、或は筆者の蒙をひらきたいと庶幾する次第である。

## 一、地理學の本質と地理學的法則

地理學は嘗つて二つの部分に別れて居た。即ち自然地理學と人文地理學とがそれである。前者は、地表上の自然現象を取扱ひその分布狀態を明かにするものであり、後者は、人間界の諸現象を取扱ふに當つても、その背景をなす自然を無視することは出來ないのである。地理學をして、この自然地理學から、地表上の自然を取扱ふ諸種の專門的科學が獨立した。斯くして氣象學・地質學・海洋學・人種學等が、發達して來た。その結果從來の自然地理學なるものは、全く解體するに至つた。

自然地理學が解體した以後は、事實上、地理學即ち人文地理學とならざるを得ない。然し乍ら、文化現象としての人間界の諸現象を取扱ふに當つても、その背景をなす自然を無視することは出來ないのである。地理學をして、單なる記述に終らしめず說明へ進ましめんとすれば、文化現象の分布に關聯を持つ自然現象の分布をも明かにすることが必要である。自然地理學が解體しても、自然現象の分布は、この意味に於いて地理學の重要な關心の對象である。とは云へ人文地理學は、自然現象の分布に對して、そのものとしては關心を持つものではない。人文地理學本來の研究對象は文化現象の空間的（場所的）分布狀態を明かにすることである。

從來人文地理學者は、斯學の本質に關して二派に別れ、相異なつた說を主張して居る。即ち一つは地理學を法則科學と見るものであり、他はそれを個性記述學と見るものである。前者は文化現象の空間的（場所的）分布を何等かの合理的發展の結果と見るが故に、文化現象とそれが分布されて居る地表との因果關係の探究に努力し、その努力の結果は諸種の地人相關論に表現されて居る。後者は、地理學的法則の價値を否定して、地誌的研究に努力を集中し、地誌の完成こそこの地理學研究の任務を果し得る方法であると觀る。

然し乍ら、吾々は地表上に於ける文化現象分布の現狀を知ることに滿足するものでなく、その將來に對する豫見を得ることに更に重大な關心を持つものであるから、斯かる仕方に於いて文化現象の分布を明かにするが爲めには、法則の樹立を必要とするであらう。まことに法則の定立及びその說明に依つて、斯學の對象領域に於ける普遍的必然的諸關係を明かにし、それに依つて「未だ經驗せられざる對象の認識を支配し、之を分類し、又その性質を豫期せしむる」（田邊元著「科學概論」大正七年、二二三頁）ことに努力することが必要であり、斯くしてこそはじめて斯學は科學となり得るのであるし、又斯くしてはじめて人類の進步に大なる貢獻をなす知識を提供し得る。且つ又地理學的現象即ち空間的分布現象は、何等かの合理的發展の結果たるに相違なく、從つて合則性を見出すことは困難ではあるが不可能でない筈である。斯くして地理學は究極的には法則科學として觀られねばならない。

## 二、地誌の意義

然らば如何にして法則科學としての地理學を成立せしめるか。それが爲めには、地誌的研究を基礎として出發するより他はないのである。即ち文化現象の空間的（場所的）分布に關聯する諸關係は、詳細な地誌的研究を俟つてはじめて明かにされ、吾々は斯くして示された諸關係の中から法則を見出さねばならない。而してひとたび法則が定立されゝば、それは今後の地誌的研究に於ける敍述及び說明の基點となるであらう。結局、地理學の本質を地誌にありとする見解は拒否されねばならぬが、同時に吾々は、地理學の不可缺的な部分として地誌を是認せねばならぬ。しかも地誌は法則探究の爲めにのみ必要なのではない。絕えず流轉する世界に於いては、常に異なつた條件が法則の作用に影響して來るが故に、この條件の變化が地誌的研究に依つて常に明かにされて居ない場合には、假に法則

が定立したとしても、吾々はそれを特定の場合に適用して說明或は豫見を行ふことが不可能である。結局、地理學は法則科學として看做されねばならぬけれども、地誌も亦常にその基礎的部分として認められねばならない。

地理學の本質を地誌的研究に求める人々は、斯學を以つて法則科學とすることに反對するが、その主たる理由は次の二つに要約される。即ち一は、普遍性のない法則しか得られないといふこと、他の一は、地理學に於いて法則を定立することは極めて困難であり、加ふるに、定立された少數の法則は自明のもので、科學的研究に値しないといふ見解である。(石橋五郎「我が地理學觀」地理論叢、第一輯、昭和七年、一二——一六頁參照)而して斯學を地誌なりとして積極的に主張しようとする主たる理由は、斯學が古來地誌から發達し來たり、現在に於いても地誌的研究が多く行はれて居ることから、地誌を地理學の本體なりと認むることである。(同論文一〇——一一頁參照)これ等主張の基礎たる事實はすべて眞實なりと云はざるを得ないけれども、さればとてこれ等を以つて右の如き主張の理由とし得るものではない。蓋し、右の第一の理由は、法則の性質を十分に理解し得ぬ結果として生じたものである。自然科學に於ける法則にしても、いづれも法則である以上、同じ程度の普遍性を有する。文化科學の法則が自然科學のそれに比して特に少い普遍妥當性しか持たないと云はれるのは、自然科學に比して文化科學が未だ發達の程度が低い爲めに、法則の作用する場合の條件を吾々が知悉して居ないからである。第二の理由は要するに妥協である。即ち地理學に於いて法則を定立することは極めて困難であり、從來の研究に依つては、何等有用な法則が生まれて居ないから、法則の探究は無意義なりと看做すものであつて、地理學研究の目標を法則定立にありとなすべきを容認し乍ら、しかもそれを達成することが極めて困難なるが故に、この目標を放棄しようとするものである。然し乍ら科學的研究に於いて妥協は許されない。吾々は法則の探究に全力を盡



くすべきであつて、その仕事の難易を問ふべきでない。更に又、發生史的見地から地理學を以つて地誌なりとする主張の誤れることは云ふまでもない。吾々は先人の誤つて歩んだ道を辿る義務は毫もないのである。

勿論、地理學を以つて法則科學なりと看做したからといつて、法則の定立が直ちに行はれ得るとは、恐らく何人も考へぬであらう。否それどころか、その仕事が極めて困難なことは何人も熟知するところであらう。從つて研究の手續としては、綿密な地誌的研究に沒頭することにならざるを得ない。然らば、地理學を以つて地誌なりとする人々の研究と、その實質に於いて差違が生じないであらうか。若し然りとすれば、法則科學なりと稱してもそれは實質の伴はぬ虛飾に過ぎない。然し乍ら、單に地誌的記述を行ふ場合と法則探究を目ざして地誌の研究を行ふ場合とは、ひとしく地誌であつても、その內容に於いて恐らく著しい相違が生ずるであらう。吾々は地誌的研究に當つて、普遍的なもの恒久的のもの必然的のものに絶えず注意を集中すること、羅列的記述を棄て、分析及び綜合に依る統一的表現に努力すること、更に又單なる記述でなく正しい透徹した說明を求めることに依つて、法則科學の基礎としての地誌を獲得することが出來るであらう。

## 三、地理學の研究對象とその任務

地理學は古來土地に關する學問と云はれて來た。(小野鐵二、「地理學の性質に就いて」史林、第十二卷第三號、參照)土地或は地球表面は、自然地域としても觀ることが出來、文化地域としても見ることが出來る。前者の場合に自然科學としての地理學が成り立ち、後者の場合には文化科學としての地理學が成り立ち得る。然し乍らいづれにしても、斯學が土地或は地表を取扱ふといふ意味は、その上にあるものを地表との結合に於いて取扱ふのである。自然科學としての地理學の場合には、地表を基礎としてその上に結合する諸種の自然現象が觀察され、文化科學と

しての地理學の場合には、地表に結合する諸種の文化現象が研究される。換言すれば場所との關聯に於いて諸現象を觀察するのであつて、文化現象を取扱ふ諸科學と肩を並べ地理學がその一つとなることを要求し得るのは、斯かる獨自の研究領域を有するからである。（恒藤恭、「文化現象の地理的認識――その一般的基礎について――」經濟論叢、昭和二年十月號、參照）然し乍ら從來の自然地理學から諸種の專門的科學が獨立した現在に於いては、右に述べた如き自然科學としての地理學は事實上行はれて居ない。蓋し文化科學としての地理學に於いても、文化現象のみを取扱ふのでは勿論なく、文化現象を集載して居る地表の自然現象をも取扱はねばならぬからであり、又文化現象と關聯なく單に自然現象のみを取扱ふ地理學は、假令論理的には成立可能であつても、獨立した研究が行はれる程の重要性が認められぬからであらう。元來地理學は實用的な學問として發達して來たのである。

地誌的立場をとる人々は、地理學の研究對象を以つて、個々の自然現象或は文化現象ではなく、地表に於いてそれ等一切が結合した結果を所謂「地的渾一」として觀るべきことを主張する。即ち「地球表面を構成する諸要素を以つて、「自然現象が自然現象のまゝ、文化現象も文化現象のまゝ取扱はれるならば地理學の意味を失ふものであつて、兩者不離の關係に於て一定の認識の集團的對象をなすものとして相互關聯せる相に於て把握されねばならぬ。」（松井武敏、「經濟地理學序說――實際研究の序として――」地理論叢、第二輯、昭和八年、一一六――七頁）地表に即して總括された全體は、或る場合には「地域」とも云はれ（註一）その感覺的な表現は即ち所謂景觀・風景・風土・景相・環象等の名を以て呼ばるゝものである。（同論文一一七――八頁參照）

註一、筆者は「場所」といふ言葉を試みに用ひてみた。



個々の現象から構成される全體は、確かにそれ等構成要素の單なる集積ではない。個々のものが相互に作用し反作用して、その結果それ等の單なる集積とは異なるところの全體が構成される。又その反對に、個々のものは斯くして生じた全體から制約を受ける。故に全體を全體として取扱ひ、個々のものを取扱ふ場合でも、全體との關聯に於いてのみすることは正しい。それに依つて法則を發見することが出來る筈である。然し乍ら地理學の研究任務は、地表に於ける一切の事象の分布狀態を明かにすることにあるが故に、地理學研究は、單に右の如き地誌的研究のみで終ることは出來ない。幾多の景觀が比較され、或はその構成要素たる個々の現象が幾多の地域にわたつて比較されることが必要になる。即ち幾多の地誌的研究の成果が、全地表或はその一部分を單位として、總括的に取扱はれねばならない。

斯くして人文地理學の研究對象は、地表を基礎として他の文化現象或は自然現象と結合して居るものとしての文化現象であり、一言にして云へば、場所との關聯に於ける文化現象である。

地理學の研究對象が斯くの如く決定されて來る理由は、斯學の研究任務を考察することに依つて明かになる。即ち前述の如く、斯學の任務は、一切の現象の地表に於ける分布狀態を明かにすること、換言すれば、如何なる事象が如何なる場所に如何なる程度に分布されて居るか、又それは何故に然るや、を明かにすると共に、進んで將來の分布狀態の豫見にまで到達することである。然るに地表の自然及び文化現象はすべて相互に影響し合ふ關係にあるが故に、地表を單位としてその上に於ける自然現象及び文化現象のすべての結合體を考察しない以上は、眞に正しい說明及び豫見を行ふことが出來ない。從つて場所との關聯に於ける現象をその研究對象とすることになる。然らば、斯學の研究任務は何故に右の如く決定されるか。

アルフレッド・ヘットナァに從へば、それは次の如く說明される。即ち現實世界の認識に當つては、吾々は三つの觀點からこれを行はねばならぬ。「吾々は、第一の觀點から類似の諸關係を、第二の觀點からは時間に伴ふ發展を、第三の觀點からは空間に於ける配置及び分布を、觀察する。」（Alfred Hettner, Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau, 1927. S. 114）即ち時間及び空間の關係から離れて、「物」の同類或は異類を取扱ふ觀點と、空間的に相並んで存在する事象間の關係を取扱ふ觀點とである。この中いづれの一つが欠けても、吾々の現實世界への認識は不完全となる。云ふまでもなく第二の觀點に立つものは歷史であり、第三の觀點に立つものは地理學である。（Ebenda, S. 110-117. 綿貫勇彥著「地理學方法論」昭和十年、六一——六七頁參照）

勿論、地理學でなくとも、現實世界に關する諸科學に於いて地理的考察が行はれることは多い。而してその場合には、それ等科學に特殊な夫々の領域内の現象に就いてのみ、斯かる觀察が行はれる。他方これに對して、地理學に於いても、地理的認識の完全さを求めるが爲めに、經濟學的・政治學的・社會學的等の諸現象が夫々分離され、經濟地理學・政治地理學・社會地理學等が行はれて居る。從つて、斯かる特殊的な現象のみを取扱ふ場合に、それが果して地理學として獨立し得るものか否か頗る疑はしくならざるを得ない。斯くして例へば經濟地理學を以つて經濟學の一部門と看做す主張が生ずる。（註二）ヘットナァの說は、この點に關して何等の說明を與へて呉れない。然し乍ら、右の如く狀殊的な現象のみを取扱ふ地理學部門ではなく、地表に相結合する一切の現象を全體として取扱ふ場合には、それが明確に獨自の對象と方法とを持つが故に、明かに獨立した學問として地理學を認めることが出來やう。

註二、この問題に對しても、筆者はまだ決定的な解答を與へることが出來ない。然し乍ら、經濟學が地理學からいづれかの一部門であるといふよりは、むしろそのいづれからも獨立した別個の學問ではないかといふ疑ひを抱いて居る。嚴し後述する如く、經濟現象の場所的分布には、氣候・土壤・地形等の自然環境から說明さるゝ部分も多いのであつて、地理學的な技巧と經濟學理論との兩者を必要とするからである。

## 四、地理學的法則の性質

前述の如く、地理學は現在地誌的研究を主として居るけれども、本來法則の定立を目ざすべきものである。然らばその法則は如何なる性質のものであらうか。自然地理學に於いて求めらるべき法則は、勿論自然科學的法則であつて、場所とその場所に於ける自然現象との因果關係に關するものであるが、それに就いては、自然地理學が事實上解體して居る現在、こゝに特に述ぶべきことがない。且つ又この場合でも、法則一般に共通な性質は、今こゝで述べる必要はない。

人文地理學は、地表との關聯に於ける文化現象をその研究對象とすること前述の如くであつて、更にその任務とするところは文化現象の分布狀態を明かにすることである。このことから、人文地理學の求むべき法則の性質が決定されて來る。即ちそれは場所と現象との因果關係を示すものでなければならぬ。一定の現象が一定の場所に分布されて居るのは何故であるかを示すものでなければならぬ。而してこゝに場所と云ふのは、地表及びその上に結合する一切の現象の全體である。

オットー・マウルは人文地理學に對して次の如き法則を示して居る。即ち第一には「因果の法則」であつて、周圍の自然が人間及び人間活動へ及ぼす物理化學的な因果關係や、生物學的因果關係・心理的因果關係等の存在することを示す。第二は「中間項の法則」と呼ばれ、「自然景觀及び文化景觀」から人間及び人間活動へ及ぼされる影響

は、大部分直接的のものでなく、何等かの中間項を通じて間接に作用すると云ふもの、第三は「關係變化の法則」と稱せられ、人間は景觀に依つて影響され變化するが故に、從つて景觀と人間との關係は永く不變では居ないと云ふもの、第四の「發展の法則」とは、文化景觀は現在既に消え去つた過去の原因の結果として生ずるかも知れないが故に、斯かる場合には發展の法則を考慮し、過去にまで原因を探究することが必要なりとするもの、第五の「移行及び引用の法則」とは、人間の活動は地理的地域の間に移行・傳播し引用するが故に、景觀の考察に於いて外來のもの・同化されたものを注意すべきことを示すもの、而して最後の「地理學的作用の交互作用と統一の法則」は、景觀から人間への影響のみでなく人間から景觀への影響もあるが故に、この交互作用と斯かる關係から生ずる統一とを認める必要があることを示して居る。（辻村太郎・山崎禎一譯述「人文地理學」昭和十年、五一一三頁參照）

これ等はすべて場所と人間及び人間生活との間の因果關係に關して居る。自然景觀と云ひ文化景觀と云ひ、すべて筆者がこゝに場所と云ふものの中にある。第一の「因果の法則」は自然から直接に人間の生理的・心理的狀態へ與へられる影響に關する部分を含むが、これは自然現象であつて、そのものとしては吾々の關心を持つところではない。例へば溫帶の常住者が熱帶的氣候の下に何等かの生理的變化を經驗したとすれば、その限りに於いて全く自然現象に過ぎぬかも知れず、從つて斯かる因果關係をそのものとして吾々は追求しない。然し假にその生理的變化の結果として勞働力の減退を來たし、事實その人間の活動が鈍つたとすれば、それは既に一つの文化現象の中に入る。斯かる意味に於いてこの第一の法則も是認出來るであらう。他の五つの法則はすべて明かに文化現象と場所との因果關係に關するものである。斯くして吾々が人文地理學で求めようとする法則は、すべて場所と文化現象の分





布との因果關係に關するものである。

## 五、地人相關論

斯くの如き因果關係の追求は、地理學發達史上、環境論的説明及び所謂地人相關論に於いて、その主たる表現を見出す。然し乍ら古來地理學に於いては、單なる地誌的記述にのみ關心を持たれる場合が多かつたし、地球を創造者に依つて與へられたものと見、從つて地球と人間との關係の中に創造者の意志にそふ目的を認めるところの目的論的見解も行はれ、殊に記述的地理學はいまだにその勢力を失つては居ない。故に因果關係を探究する努力は、現在までのところ決して地理學の主流をなすとは云ひ得ないかも知れないが、上述の如く、論理的に云つてそれは地理學の主眼として求むべきものであり、以下にその輪廓を述ぶるが如く、地理學史上に於いても漸次發展を見つゝある。

地理學史上に於ける場所と文化現象分布との因果關係への探究は、先づ最初に所謂地理的唯物論と稱せらるゝ環境論的説明として現れた。これは一切の社會現象は自然環境に依つて決定されると見るものであつて、中世紀を通じて支配的なりし封建主義的觀念形態即ち傳統主義、神祕主義、絶對主義に對する對立物としての、希臘的理智主義乃至は合理主義のルネッサンスであり、又、曾て全歷史の原動力、人類の運命の決定者として現はれてゐた所の神乃至は絶對主義的主權に對して「自然」を置換しやうとする思想（川西正鑑「經濟地理學方法論」昭和八年、三一頁）として歷史的意義を持つ。從つてこの説の崩芽は古代に遡つて求めることが出來るが、主たる主張者（ジャン・ボーダン、モンテスキュー等）は近世市民階級勃興の時代に屬する。これは又、一つの史觀であるけれども、地理學理論としても史觀としても、重大な欠陷を藏するものであることは、以下述ぶるところから自ら明かになるであ

らう。(川西、前掲書一四三―一六二頁參照)

自然と人間との因果關係を論じた第二の傾向は、所謂地人相關論に見出される。これは、地理的唯物論と異なつて、人間が自然に依つて影響さるゝと同時に、人間は又自然に變化を與へることを主張する。最初この理論を展開したのはラッツェルであるが、その後多數の地理學者に依つて發展せしめられ、殊に經濟地理學の方面に於いては、その方法論の主潮をなして居る。從つてひとしく地人相關論と稱することが出來ても、その內容には多くの相違あるものを含むで居る。即ち自然を基礎として見る立場があり、更に自然と人間とを同權的同値的存在と見る立場がある。又單純に自然と人間との直接的な機械的な相互關係を說くものに對して、同じく直接的機械的ではあるけれども、特定時に於ける文化水準及び時代相に從つて、自然對人間の相互作用が變化することを說くものがあり、更にこれ等兩者のいづれとも相違して人文地理學上に於ける自然對人間の因果關係は或る中間項を通じてのみ作用すると理解するものがある。(川西、前掲書、二十一頁以下、佐藤弘著「經濟地理學總論」改造社版、昭和八年、五七―一二二頁參照)

單純な直接的な關係を認める所謂「素朴的地人相關論」(佐藤、前掲書、二〇頁)に就いては、今こゝで述べる必要がない。文化水準及び時代相を考慮するブルーノ・ディートリッヒ一派の所謂交互作用の理論と、中間項の存在を主張するウィットフォーゲル一派の辨證法的な地人相關論に就いて、簡單にその概略をうかゞつて見よう。

(Bruno Dietrich, Grundzüge der allgemeinen Wirtschaftsgeographie, Berlin, 1927. S. 29-35. 佐藤、前掲書、五七―七〇頁參照)

ディートリッヒに從へば、人間と自然とは二個の異なつた本質でもなく相互に分離した存在形式でもない。この



兩者は或る場合には強く或る場合には堅く結合して居る。然しこの兩者は又相互に影響を與へて、一が他を變化せしめ合ふ。自然(即ち原始環境・原始景觀)は斯くして環境力として、他方人間は文化(即ち文化景觀)を生ぜしめる文化力として、對置され得る。この二つの力の作用は、人間の到達した文化水準の如何に應じて相違する。原始人の場合には、文化力は環境力に對して極めて弱い。更に又それは時代相 Temporität に依つて相違する。例へば歐洲大陸の關門の位置を英國が占めて居るといふことは、强力な海國の發展に常に好都合である。然しそれが實際に效果を持つのは、特定の時代・特定の情勢の下に於いてゞある。或は又米國に於ける自働車工業は、土地開發の植民地的速度及びそれに伴ふ道路の發達がなかつたならば、今日の如き發展を見なかつたに相違ない。然し乍ら、土地開發及び道路の發達は遙かに以前から超こつて居るに拘らず、自働車工業は漸く現代に至つて發展を見た。斯くの如く、自然環境が經濟現象へ及ぼす影響、或は人間の文化力が自然環境へ與へる變化は、特定の時代的要素に應じて相違した效果を持つ。これを時代相として、文化水準と共に、自然對人間の關係に於いて考慮に入れねばならない。

次に又「嚴密に解釋すれば、自然と人間との關係に於ける純粹の交互作用は、あらゆる文化發現、經濟發現の當初にのみ存在する。環境の變化が始まる瞬間に於いて、原始環境の自然力の代りに、經濟する人間の勞働の印を帶びた新しいものが現れる。」(Dietrich, a. a. O., S. 33)蓋し人間の文化力が自然環境を變じて文化景觀を生ぜしめるからである。斯くして結局自然と人間との交互作用は、「原始景觀十文化景觀――→發展する人間×文化水準函數×時代相」といふ定式に現される。(Dietrich, Wirtschaftsgeographie. Methoden-Probleme-Anregungen. Wien, 1933. S. 23)

ディートリッヒが、自然と人間との關係を、文化水準及び時代相に依つて制約されるものとしたことは、この關係を單純に一般的に考察したものに比して、地理學をして確かに一歩前進せしめたと云ふべきであらう。然し彼の場合に於いても、自然對人間の關係は直接的なものとして考察される。文化水準及び時代相は、單に自然及び人間の兩者の力が相互に作用する態樣を制約するに過ぎない。然し乍ら文化現象と場所との關係に關心を有する人文地理學の立場から見れば、人間と自然との關係は、人間が經濟活動その他の活動を起こす場合にはじめて生ずるのであつて、從つて人間と自然とは斯かる活動を通じて間接的に相互的作用を及ぼし合ふ。勿論直接的な關係も考へ得られぬこともない。例へば氣溫に急激に下向した場合、人間が何の行動を起こさないでも、寒さを感じるに相違ない。然し斯かる關係は自然科學的な關係に止まり、そのものとしては吾々の本來の研究對象でない。吾々の關心を持つのは、文化現象の分布に關聯する關係であり、それは常に間接的關係である。斯くしてこの間接的關係を媒介する「中間項」を考察して新しい理論を提唱したのがウィットフォーゲルである。

ウィットフォーゲルは唯物辨證法に基く經濟地理學方法論として、自然對人間の關係に關する理論を展開するのであるが（Karl August Wittfogel, Geopolitik, Geographischer Materialismus und Marxismus, Unter dem Banner des Marxismus, III Jahrgang, 1. 4. u. 5. Hefte. 川西正鑑譯補「地理學批判」昭和八年、參照）彼に從へば、自然は、勞働過程の三契機即ち勞働力・勞働手段・勞働對象に具體化することに依つて、生産關係に於ける人間と接觸するに至る。換言すれば、勞働過程なる中間項に依つて媒介される間接的な關係を持つのである。勞働過程の三契機は斯くして自然的側面と社會的側面とに夫々分析される。人間は自然と全く別個のものではなく、結局それ自體も自然の一部であつて、唯々能動力を有し能動的要素として人間を圍繞する自然と協定しつゝ對立する關係にある。故に右の三契機中、先づ第一に勞働力も自然的側面と社會的側面とに分析される。即ちその自然的側面は、人間の生理的特質・種族・國民性等に依る自然的勞働能力としての身體的・精神的性質であり、社會的側面は、勞働技巧及び知識に依る獲得的勞働能力としての人間の勞働組織及び資格である。勞働手段の自然的側面は、土壤及び水の性質・風・熱・蒸氣・電氣等の自然力であり、社會的側面は、人間の勞働の所産である機械及び道具である。而して又勞働對象は、未だ農業的に栽培されざる植物・人工的に飼育されざる野生の動物・及びすべての鑛物を含む自然的側面と、人間の勞働の結果たる原料を含む社會的側面に分析される。斯くしてこの關係は次の如く要約される（Wittfogel, a. a. O. 4. Heft, S. 521. 川西譯補、前掲書、一七四—五頁）

社會的側面の展開後に於ける勞働過程の三基本契機

| 自然的側面 | | 社會的側面 |
|---|---|---|
| 「人間の性質」（生理的特質 種族・國民性） | 勞働力 | 組織・資格（技巧並びに知識） |
| 自然力（土壤及び水の性質・風・熱・蒸氣・電氣等） | 勞働手段 | 機械・道具 |
| 自然的素材（「人間の産業から獨立して存在して居る」樣な） | 勞働對象 | 原料（勞働に依つて「濾過されたる」） |

右は自然と人間との最も普遍的な抽象的な形態に於ける關係であつて、生産關係の歴史的發展と共にこれ等基本的契機の重點が變動するに從つて、自然と人間との關係も變化して來る。その變化は次の如く要約される（Wittfogel, a. a. O., S. 522. 川西譯補、前掲書、一七六―七頁）

歴史的發展過程に於ける生産關係の三基本的契機内の自然的要素の意義の變動

| 生産の型 | 原始社會（採集者・狩獵者・漁撈者） | 前資本主義的農業階級社會 | 工業的資本主義社會 マニュファクチュア | 工業的資本主義社會 機械工業 |
|---|---|---|---|---|
| I 勞働力 | 社會的側面 發展はIIを媒介としてIIIに依存する 自然的側面 種族、生理的分業 | 社會的側面 就中IIに依存する 自然的側面 種族（？） | 社會的側面 副期的（「社會的自然力」としての協同） | 社會的側面 IIに依つて規定される（科學） 自然的側面 生理的分業の歪曲 |
| II 勞働手段 | 社會的側面 道具（未發達の） 自然的側面 殆ど未發達 | 社會的側面 道具 自然的側面 決定的（土壤の豐穰、水―「アジア！」―） | 社會的側面 道具 自然的側面 水力 | 社會的側面 機械 自然的側面 工業的に利用されたる自然力の巨大な意義 |
| III 勞働對象 | 抽出的契機（自然的素材の意義）が絶對的に支配する | 抽出的契機は（手工的）工業の副次的領域にとつてのみ重要 農業に於いては有機的「原料」が優勢 | 同上、繊維工業が支配的なる間は抽出的契機は左程重要ならず | 抽出的契機は今や非常に重要である 原料供給の爲めの抽出的産業の飛躍的重要性 |

右の如きウィットフォーゲルの理論は、經濟地理學の方法論として、幾多の極めて重要な長所を持つ。今、經濟現象の場所的分布狀態を明かにしようとする地理學的觀點に立つて、この理論に基いた研究を進めるならば、必ずや大なる收穫が齎されることは疑ひない。然し乍ら、經濟現象の場所的分布は、勞働過程を通じての自然と人間との關係を明かにすることのみに依つて、明かにされるであらうか。場所と文化現象の分布との因果關係に關するウィットフォーゲルまでの理論は、すべて自然對人間の關係を取扱ふものであつた。即ち文化現象の分布狀態は、それと自然環境との關係を探究することに依つて、明かにされると看做して居たものと云つて差閊ない。斯かる立場からすれば、ウィットフォーゲルの理論は最も完全なものと云ふべきであらう。然し乍らこの見解は、本稿に於いて述べられて來たところと明かに相違する。

## 六、地理的環境の概念

人文地理學の任務は、文化現象の空間的（場所的）分布狀態を明かにすることであり、從つてその研究の中心は、特定の景觀或は文化現象が何故特定の地表に分布されて居るかの問題に置かれて居る。結局それは特定の場所と景觀或は文化現象との因果關係の探究に他ならない。同時に又景觀それ自體も、その中に含まれる文化現象の生成と因果關係にある。

斯くして文化現象或は景觀を生成せしめるものは、これを環境或は外圍と稱することが出來、一定の地表に於ける環境といふ意味でこれを地理的環境と云ふことが出來る。結局場所或は地域と文化現象との關係は、地理的環境と文化現象との關係と云ひ直すことが出來る。前述の地人相關論は、すべて地理的環境とそれに圍まれる人間活動との關係を取扱はうとしたものである。同樣にこの地理的環境と屢々同じ意味に用ひられる言葉に、地理的條件・地理的要因等がある。更に場合に依つては、地的束縛性として表現されることもある。然し乍ら地理的環境と云ひ地理的條件或は地理的要因と云ひ、殆ど如何なる場合に於いても、人間活動の結果でない所與の自然（氣候・

地形・土壌・水界等）の意味に用ひられて居る。地理的環境・地理的條件・地理的要因といふ言葉は、自然的環境・自然的條件・自然的要因といふ言葉と、極めて無雜作に置換へられることが普通である。換言すれば、文化現象の場所的分布を決定して來る環境力を自然にのみ認めるのであるか、或は文化景觀も環境となる以上は自然と同一視するものであるか、或は地理學の究明すべき範圍をそこに限定するものか、そのいづれか一つである。前述した諸種の地人相關論も例外をなすものでない。ディートリッヒの如きは、その定式に明かに示された通り、環境としての原始景觀と文化景觀との兩者を擧げ乍ら、文化景觀も環境となるや「自然」の一部と看做すものであつて、その理論を「自然と人間との交互作用」、「環境の自然力と人間力との同値的」交互作用を取扱ふものとして居り、又、文化段階及び經濟段階・文化景觀及び經濟景觀に就いて論じて居るに拘らず、これ等を環境として論述しては居ない。（Grundzüge, o. o. A., S. 29. 110-134. Wirtschaftsgeographie, o. o. A., S. 21 u. 22）果してこれでよいのであらうか。

地理的環境なる概念は、上述したところで明かな通り、所與の自然環境のみでなく、人間活動の結果たる文化環境をも含まねばならない。これは單なる用語上の問題ではない。地理的環境といふ言葉が、自然環境といふ意味に用ひられやうと、自然及び文化環境の兩者の意に用ひられやうと、それが單に用語上の差異に止まるならば、さして顧慮する必要はないであらう。然し乍ら地理的環境なる言葉を自然環境と同一視するか或は文化環境をも含ましめるかの相違は、とりもなほさず地理學の探究する因果關係を自然對文化現象の間に求めるか或は自然環境及び文化環境の兩者と文化現象との間に求めるかの相違である。この意味に於いて地理的環境なる概念の問題は、地理學上最大の重要性を有するもの一つとなる。

自然環境と文化現象との關係にのみ考察を限定することは、その理由が、單に自然環境の力のみを重要視するためであると、文化環境をも環境としては自然と同一視するためであるとを問はず、ひとしく重大な誤謬であらう。何となれば、文化現象の形成に於いては、文化環境の影響は一般に極めて大きく、これを取扱はぬ場合には、地理學の價値は殆ど喪失されはせぬかと思はれる程である。從つてディートリッヒ及びウィットフォーゲルの場合には、前者はその定式に明かな如く、後者はその勞働過程の分析に依り、兩者とも事實上文化環境を考慮するものと見られるけれども、場所對文化現象なる地理學的關係を自然對人間の關係と認める限り方法論的に誤謬に陷つて居ると云ふべきではなからうか。

文化環境が如何に重要であるかは、今更說明する必要もないかと思ふが、とも角二三の例を擧げて示せば、その最も著しい場合は交通機關及び人工的交通路である。例へば鐵道の開通が屢々その沿線に急激な變化を齎すことは何人もよく知るところであらう。スエズ・パナマ・キールの如き重要な運河の場合は、文化環境としての意義は更に重大である。又日本農業の特色たる養蠶現象にしても、日本農業の自然環境と共に、米國に於ける大消費市場の存在といふ事實が、この特色の形成に對する最も重要な要因の一つと見られねばならぬ。又地方に於ける工業的小都市出現の現象にしても、自然環境よりは、交通の便宜・電力料・地價・勞働賃銀等の要因により、多く依存する場合があるであらう。更に又エチオピヤの農業の場合を見ても、その灌漑の主なる水源が英國の支配下にあるといふ政治的事實に依つて、その發展を歪められて居るかも知れない。

斯くの如く經濟的・政治的・社會學的等の諸事實が、文化環境として特定の地表に於ける文化現象に大なる影響を及ぼして居る例は殆ど無限に擧げられると云つても、大した誇張ではないであらう。人或はこれ等すべてをも究

極的に自然環境より說明し得ると主張するかも知れない。然し乍らそれは結局、一切の事象を自然より出發して說明せんとする地理的唯物論に墮するものと云ふべきである。

右に依つて明かな如く、單に自然的環境の力のみを重要視するが爲めに文化環境を無視する立場があるとすれば、それは疑ひもなく誤りである。又文化景觀もひと度環境となるやこれを自然環境と同一視する立場は、自然環境の比較的固定性と文化環境の可變性に基く兩者の本質的差異を無視するものであり、更に又地理學の任務を自然と人間との關係にのみ限定しようとする立場があるとすれば、それは、文化現象に對する吾々の認識に對して、地理學の貢獻し得るところを極めて少からしめるといふ結果を齎すものである。斯くして結局、地理的環境へ文化環境をも含ましめて、前者は、後者と自然環境とよりなるものとすることが必要となる。

然し乍ら問題はこれで終るのではない。地理的環境を右の如く解することに依つて、極めて困難な新しい問題に當面する。即ち文化環境を地理的環境中に包含せしめ、且つ自然環境と區別する結果として、この文化環境の意味を判然と決定する必要を生じた。それを、文化現象の形成に影響する環境のうち、人間行爲の結果として生じた部分として、一般的に云ひ現すことは出來る。然し乍ら、環境論的見地からすれば、特定の文化現象を圍繞する一切のものが、その特定の文化現象へ影響を與へる可能性を持つのである。換言すれば、文化景觀及びそれを構成する一切の文化現象が、直ちに文化環境であると云はねばならぬ。然るに因果關係を考究するに當り、斯くの如く一般的に云ひ現はされた全體としての文化環境のみでなく、それを構成する個々の文化現象に分析して考察される必要がある。且つ又、一切の自然及び文化現象を常に環境として取上げることが出來ないのは明かである。何となれば、特定の文化現象を中心として考察する時、その外圍をなす文化現象中には、却つてその特定の文化現象の結果として



て現れて居る部分も多く、更に又より高次の包括的な現象に對して、その構成分子たるより下位の個別的な現象がある。故に特定の文化現象を中心として考察する場合、外圍の中から一定の現象を環境として選び出さねばならない。斯かる研究手續に伴ふ技術的困難は壓倒的であることは疑ひない。從つて最も基本的な重要性を有する部分を選び出すのであつて、便宜手段としては、比較的に自然環境に類似した性質を有するものを先づ取上げることが出來る。即ち比較的長期にわたつて或る程度固定したものを取上げる方法である。（註四）例へば經濟現象關係に於いては、人工的交通路・交通機關・消費市場としての大都會の存在・原料供給地としての植民地たる資格・等は、最も明瞭に斯かる性質を備ふるものである。更に又貨幣資本の分布・貿易關係の如きはより少い程度で斯かる性質を持つ。然し乍ら、斯やうに選擇を行ふ基準は、一體如何なる原則に求むべきであらうか。例へば獨占資本の如き、經濟現象それ自體の一部として看做さるべきか、或は經濟現象に對する環境の一部と看做さるべきか、吾々をして迷はしめるものがあり、何等かの原則を立てることが是非とも必要になる。

斯くして、文化環境の取扱ひに就いての右の如き便宜手段の是非、或は現象それ自體と環境との區別の原則、等の問題が未解決の儘に殘される。これが解決されぬ間は、斯學に於いて最も重要であるべき部分が極めて薄弱な基礎の上に立つこととなり、人文地理學の將來に對して大なる希望をかけることが出來ない。

現在までのところ斯かる觀點から地理學を建て直さうとした唯一の注意すべき企圖は、本邦の川西正鑑敎授が經濟地理學の分野に於いてなされたるもののみであらう。同敎授は、その大著「經濟地理學原理」（昭和六年）に於いて、主としてディートリッヒとウィットフォーゲルの方法論を基礎とし、獨自の論理的體系を立てられた。即ち、

A　原始環境と現經濟人との交互作用

地理學の本質と地理的環境に就いて

1、勞働手段としての原始環境（氣候・地表面・水・地質・動植物・鑛物）
2、勞働力としての現經濟人（協同の原始的形態としての種族共産體・發展の原動力としての人口・イデオロギーの起源及び發展・勞働組織）
3、交互作用の形態としての勞働對象（蒐集經濟、栽殖經濟）

B　文化環象と現經濟人との交互作用
1、勞働手段としての文化環象（器具より機械及び動力の發明・交通機關の發展・資本）
2、勞働力としての現經濟人（人口の增加及び變化・技術の發展・イデオロギーの變轉・經濟組織の變化）
3、交互作用の形態としての勞働對象（農業・近代的鑛業・工業・商業・金融資本型としての產業の國內的獨占・資本の輸出・經濟領域の分割・植民地の爭奪・重工業及び重工業地の爭奪・戰爭）

敎授はこの體系を構成された論理的基礎を明かにされて居ないが、卑見を以つてすれば、この體系に對しては幾多の異論を唱へることが出來るであらう。不遜を顧みずその二三を述べて見れば、先づ環境と人間と對立せしめるに代りに、むしろ環境と經濟現象とを對置すべきではなかつたか。又假にこの大體の構成を容認するとしても、A2は原始時代の經濟人のみを論ずるのみでなく、現代の經濟人も論ぜられねばならなかつたであらうし、A3は過程である交互作用と「もの」である勞働對象とを結合せしめることに疑問があり、交互作用の形態は即ち勞働對象でなく、强いて云へば經濟現象（ウィットフォーゲルの場合には勞働過程そのもの）となすべきである。B3も同樣であるが、A3が事實經濟現象のみを取扱つて居るのに反して、B3はむしろ經濟現象に對する環境と看做すべきものまで含まれて居る。敎授の敬服に値する廣汎な研究の成果をきづつけて居ると思はれるこれ等の諸點は、結局ウィットフォーゲルの自然對人間の關係のみを取扱つた理論を、文化環境をも取扱ふ場合にまで適用することの無理から生じたのではあるまいか。ウィットフォーゲルが若し環境論的立場に於いて自然及び文化環境を人間と對置したならば、恐らく異なつた理論を示したのではなからうか。

暫くして、自然環境と文化環境とを判然と區別しつゝ兩者を地理的環境に包含せしめて、經濟地理學の體系づけを行はんと企圖された川西敎授の大なる功績にも拘らず、筆者の問題とするところに對しては、何等の解答も與へられて居ないと云つてよい狀態にある。

註四、例へばC. C. Huntington and Fred A. Carlson, The geographic basis of society. New York, 1933. は、環境に於ける文化的要素として、人口分布・人種・運河・鐵道・橋梁・地下鐵道・隧道・道路・航空路・都市・政治的境界・等を擧げ、これ等の人間の所産はすべて、何等かの態樣に於いて、人間の分布及びその活動に影響し、人間は種々の方途に於いてこれ等の各々を利用する。故にこれ等と人間界の事件との數多の關係は地理的である。」(p.506) と云つて居る (pp. 500-530. 參照)

## 七、結　語

以上述べて來たところに依り、人文地理學を以つて法則科學とし、その對象を場所との關聯に於ける文化現象に求め、その任務を以つて文化現象の場所的分布狀態を明かにしそれに說明を加ふることにあるとなす筆者の見解を明かにした。斯かる見解は、經濟地理學に關する限り、さきに筆者が斯學の歷史的概觀から到達したところの（本

稿はしがき參照）斯學の實際的任務を果す上に、最もよく適合する。

然し乍ら人文地理學一般に對して、地理的環境の概念をめぐつて重大な未解決の問題が存在する。これを解決せぬ以上は人文地理學の科學としての成立も不可能であり、從つて經濟地理學に於いても、その實際的任務を果し得るものとはならない。まことに右の問題は、その解決の如何が人文地理學將來の運命を制するものと云つても過言ではないと思ふ。

勿論、學問的研究は、方法論の確立すると如何とを問はず、これを進め得るし又進めねばならぬ。却つて實證科學に於いては、早急に方法論を確立することは、好ましくないかも知れない。蓋し研究素材の取捨選擇等に於いて過誤ををかし、ものの眞相を歪曲する虞れがあり得るからである。人文地理學一般に、そして殊に經濟地理學は、近年特に著しい發展を見た。從つて斯學の場合殊に、方法論の確立をあまりに急ぐべきでない。唯方法論的思索が常に行はれねばならぬことは云ふまでもなく、その意味に於いて筆者も、その貧しい思索の道程を發表する要求を感じたのである。故に、斯學に於いて右の如き重大な問題が存在することに對しては、結局方法論的思索と共に、一層の努力を以つて詳細な地誌的研究を進めて行くことに依り、その解決をはかるべきであらう。（昭和十年十二月廿七日記）

# 東京ビルディング街の發展に關する一調査

（都心地形成に關する一資料）

奥井復太郎

## 一

大都市領域に於ける各特殊地域の形成は當該大都市の發展過程の內に規定せらるゝものである事は、都市社會學上に於けるシカゴ學派の夙に主張するところである。郊外地の發展は都市膨脹の表徴であるが之は、同時に都心地域の完成に對應する。故に兩者は都市發展の過程に含まれた同一系統の現象に外ならぬ。

茲に於いて郊外地の發展と都心地域の完成とを相關せしめる因子がある可きである。前者に於いては、郊外人口の增加として最も顯著に現はれ、後者に於いては、後段述ぶるが如き都心地の特徴を完備し、これに隨應して中心地域の人口の比較的絶對的減少を惹起す。而して郊外地と都心地との有機的連絡は交通脈となつて現はれる。此三つの現象は都市發展の過程に於いて不可分である。其の限りに於いて、是等三現象の一を缺いた、郊外又は都心地の成立は全く考へられぬ事である。東京に就いて云へば、舊市內の人口はほゞ二百萬を飽和點としてゐる、故にそ